

【最優秀賞】愛媛県人権擁護委員連合会長賞

「僕らは今を生きる」 今治市立北郷中学校 3年 佐野洸太郎

去年の秋、僕の祖父は、アルツハイマー型認知症だとわかった。

八十歳の祖父は、高齢者の運転免許認定講習に行き、実技試験は合格したが、認知能力検査で不合格になった。僕たち家族は、年を取ったから物忘れがひどくなったのだと思っていた。僕は、祖父自身もそう思っているだろうと思っていた。軽い気持ちで病院に行ったが、そこでアルツハイマー型認知症だと診断された。僕たちは、驚き困惑した。口には出さなかったが、祖父自身が一番ショックを受けていたと思う。

それから生活は一変した。祖父は、病気の進行を遅らせる薬を飲むために、運転免許証を返納した。今までのように外出が自由にできなくなってしまった。僕の塾の送り迎えもできなくなり、僕は自転車で塾に行くようになった。

祖父は陶芸が趣味で、たくさんの作品を作り、たくさんの賞を取った。陶芸教室では、先生として生徒に指導をしていた。しかし、教室に車で通えなくなり、陶芸教室を辞めてしまった。「家にある陶芸場でも創作活動ができるよ。」と、僕は明るく勧めてみたが、祖父は、陶芸場にも行かなくなった。毎日、寝て、起きて、食べて、テレビの前に座って、また寝て、同じことを繰り返した。「外食に行こう。」と誘っても、行こうとしなかった。祖父の中で、何かが消えてしま

った。

両親が働いていたので、僕は、小さい頃からすぐ裏にある祖父母の家で過ごすことが多かった。祖父は、優しくおおらかで、僕の願いを何でも笑顔で聞いてくれた。しかし、今の祖父は、何度も同じ話を繰り返す。昔話ばかりをする。僕は思わず「さっきもその話聞いた。」と迷惑そうに言ってしまった。祖父が認知症であると分かっているのに、祖父と話をするのが負担で冷たく接してしまう。それを見た母が「おじいちゃんは、今を生きる人になったんだよ。」と言って笑った。祖父は、数分前の過去を忘れて、今だけを生きている。そう思うと少し笑えて、それはそれでうらやましいとさえ思えた。祖母と口論になっても、その数分後には忘れている。覚えていると腹が立つが、覚えていないから仕方がないと、祖母は苦笑いしながら、祖父にいつも寄り添っている。

ある時、祖父は僕たち家族に言った。「自分は、アルツハイマー型認知症だから、いつか皆のことを忘れてしまうかもしれない。もしも、それで皆を困らせる時が来たら、自分にかまわず、病院に放り込んでくれ。」と。その言葉を聞いて、僕は胸が締め付けられた。家族と別れなければならない時が来ることを覚悟している。その気持ちを考えると、とても切なく、悲しかった。僕たちは祖父の考えを知り、今後のことを家族で話し合い、協力して祖父を支えていこうと決めた。

中学校の総合的な学習の時間に福祉体験学習が行われた。僕は『老人ホームでの過ごし方』という講座を選んだ。少しでも、祖父のことを知りたいと思ったからだ。そこで認知症の人の気持ちや接し方について学習した。認知症になった人は、自分が認知症かもしれないと自覚していて、自分が以前と違っているのが分かると不安になり、精神的にも不安定になる。それが、いら立ちや怒りとなって表れる。祖父が以前より怒りっぽくなったのは、これが原因だった。認知症の人は、昔のことをよく覚えているが、最近のことを忘れてしまい、理解ができないので戸惑いや疎外感を感じる。優しく「違うよ。」と声を掛けられても、「自分は間違っていない。」とプライドが傷つく。そのような時は、違う話題に変えて気を逸らすと良いなど、いろいろな場面に応じた高齢者への接し方を学ぶことができた。

福祉体験学習での学習を生かし、家族で祖父への関わり方を工夫するようになった。ほんの少し変えただけで、祖父も他の家族も笑顔で過ごす時間が増えた。あまり外出をしなくなった祖父が、六月にあった市総合体育大会の水泳競技の会場に、祖母と一緒に僕の応援に来てくれた。その夜、僕の県大会出場を祝って、家族全員で夕食を楽しむこともできた。

今、日本では高齢化が進み、様々な問題が起こっている。祖父との生活を通して、安心してみんなが暮らせる社会を作るためには、正しい知識を身に付けて相

手を理解することが必要だと思った。そして、一人で抱え込むのではなく、家族や社会で協力し合うことの重要性を痛感した。

これから、祖父の認知症は進行していくだろう。それは、悲しく辛いことではあるけれど、受け入れなければならない。今後のことを想像し準備しながら、今を精一杯生きる祖父の話を笑顔で聞き、祖父との時間を大切に過ごしていきたい。